

蔦重・馬琴・写楽・越谷新聞

令和8年1月20日・第12号〈終刊号〉・旧日光街道・越谷宿を考える会

蔦重が越谷に残してくれたモノ

昨年のNHK大河ドラマ「べらぼう〜^{つたや えいが}蔦屋栄華
の ゆめぼなし
乃夢 嚟」はごらんいただきましたか。今年になり、
「^{とよとみ}豊臣兄弟」を見たのですが、セリフの騒々しさ
と武士のドラマだから、^{さつりく}殺戮のシーンがたっぷり
出てくることにヘキエキとなりました。



市川鰈蔵の竹村定之進・東洲斎写楽

日本アート・センター編・新潮日本美術文庫 21 新潮社刊H17.4

戦国の武士英雄譚と江戸の文化モノとは根本的に違うのは承知の上なの
ですが、よく1年間、NHKさんは文化モノでがまんを通してくれました。

そして、文化モノだから、越谷に関係ある人物が登場してくれる余地が
あったのです。埼玉県では、^{ひらが げんない}平賀源内の関係の秩父鉦山ぐらいしか縁がな
かった中、越谷関連は^{とうしゅうさいしゃらく きょくてい ばきん}東洲斎 写楽と曲亭 馬琴という、蔦重が育てた二人が
取上げられたのです。しかも、写楽は「写楽発見のキッカケとなった^{ほうこう}法光
寺」と「写楽の隣に住んだ村田^{た せこ}多勢子」、馬琴は「奥さんが南荻島の出」
と「俳句の先生が越谷出身の越谷^{こさん}吾山」。二人とも二つの関係。これこそ、
蔦重が越谷に残してくれたモノ。いまの私たちが誇るべき遺産なのです。

☆特別インタビュー 法光寺・前住職・樋口円准師☆

○ある日、突然に「徳島・写楽の会」から電話がかかってきたトキ～

平成9年(1997)5月、徳島写楽の会の花岡徹さんから電話がありました。

「謎の絵師写楽が斎藤十郎兵衛であること。その十郎兵衛の一族の菩提寺が法光寺であることが判明しました。江戸時代の過去帳などは残っていませんか？」とのことでした。

突然の電話でした。何が何だか、まったく訳がわからない～という答えしか、ありませんでした。研究上の必要性があると感じましたので、過去帳なら残っていると答えました

○写楽であった斎藤十郎兵衛について、何か言伝えなどはなかったのですか
まったく、ありませんでした

○築地から越谷へ移転されたのですが、 どのようないきさつがございましたのでしょうか
いろいろと候補はありましたが、お寺が移転するのに、条件として一番よかったので、ここへ引っ越しさせていただきました

○越谷という土地についてのご感想はいかがですか
わたくしも、実は築地生まれの築地育ちなのですよ。最近では豊洲の方へ移転されたのですが、市場のそばは夜中から騒がしいのです。いまの場所は、静かで、穏やかで～ こういうところで生活させていただくのは、大変、ありがたいことです。

越谷の皆さまに、写楽を偲んでいただける寺になれば～と思っております

4 大浮世絵師の一人・東洲斎写楽と越谷

東洲斎写楽は長い間、謎のヒトでした。40人以上の候補者がいましたが、決め手がありませんでした。ほんとに生きていたヒトなのかにも疑問がもたれました。江戸時代に書かれた斎藤^{げっしん}月岑の「増補浮世絵類考^{るいこう}」には書かれているのですが、それを確認する資料がなく、写楽の絵に似た絵を描く画家が次々と挙げられましたが、決め手がありませんでした。絵からではなく、文献を調べるべき～との考えに戻り、二人と一法人の努力があつて、ようやく、「写楽」の謎は解決をみました。

まず、内田千鶴子さん。浮世絵類考に「阿波藩の能役者」とあることから、この線で追求されて、大きな成果をおさめられました。

そして、中野三敏さん。元・九州大学の教授で、江戸文化、文学の専門家。浮世絵類考を柱に「江戸方角分^{ほうかくわけ}」や「八丁堀 絵図^{はっちょうぼり えず}」を追及されて、写楽に迫られました。

最後に、「徳島写楽の会」の皆さまです。「阿波藩の能役者」ということから、解決は阿波人から～との活動で、能役者は侍身分であろうとかと考えついて「寛政 重修 諸家譜^{かんせいちょうしゅう しょか ふ}」を調べ、法光寺が菩提寺であることを突き止め、写楽（斎藤十郎兵衛）の過去帳に到達されました。これらの専門家ではない方々の努力の積み重ねで、「写楽＝斎藤十郎兵衛」にたどりつかれたのです。

また、その際に、斎藤十郎兵衛の隣には、村田春海という国学者が住んでいて、子どもがいなかったため、国学者仲間で現在の越谷市恩間^{おんま}にいた渡

辺荒陽の娘の多勢子が養女に入っていたことが分かりました。村田家は干
か 鰯問屋を営む豪商で十八大通の一人にも挙げられましたが、家産を傾け隠
じゅうはちだいつう
居。その後、国典を賀茂真淵に学び、加藤千蔭とともに江戸派歌人の双壁
こくてん かものまぶち かとう ち かげ
をなした人物。養女に迎えた多勢子は江戸在住の大名の奥方や娘の家庭教
た せこ
師をしつつ、国学・歌道を学び、「都下に一人の女あり」と称される才女
でした。そして、自分が養父・春海から受け継いだ村田国学の門人を育て
たのです。多勢子は生涯独身で、自分も養子を迎えたのが隣家・十郎兵衛
の息子。のちに村田春路の名前で学者にしました。越谷のヒトが写楽の隣
むらた はるみち
に住み、写楽の息子を養子にしたのです。素晴らしい関係が出来たといっ
てもいいですね。

※斎藤十郎兵衛家のお墓は、江戸・明治時代の法光寺墓地記録が、当時
の火災あるいは関東大震災等の被災のため、残存しておらず、不明と
なっています。

このことを認識していただきたいのです！ 写楽と十郎兵衛 二つの文書の内容一致

①右の写真は越谷市の法光寺さんがお持ちの「斎藤十郎
兵衛」の過去帳の一部です。「文政三庚辰年三月七日 太
乗院寛雲居士 八丁堀地蔵橋 阿洲殿御内 斎藤十良兵衛
吏 行年五十八歳千住二テ火葬」と書いてあります。

②斎藤月岑の「増補・浮世絵類考」には「天明寛政年中の
人 俗称斎藤十郎兵衛、居、江戸八丁堀に住す、阿波侯の
能役者也一廻りに雲母を摺りたるもの多し」とあります。

別に書かれた①と②の記述の一致が写楽の実在の証拠です

④「写楽の存在」「写楽＝斎藤十郎兵衛」は証明されたのです。

写楽 中野三敏著 中公新書 中央公論新社刊 2007 年 4 月 1 日 発行 300 円



法光寺過去帳
該当箇所

努力のヒト・曲亭馬琴と越谷

写楽が「謎のヒト」とすると、馬琴さんは「努力のヒト」です。一番の努力は「98巻・106冊」と

いう大巨編「なんそう さとみ はっけんでん南総里見八犬伝」を、その執筆途中で

眼が見えなくなったのにもかかわらず、28年かか

って完成させたことでしょう。眼が見えなくなって、どうしたかという、亡くなっていた息子の嫁・お路さんを説きふせて口述筆記してもらったのですから、「努力のヒト」はむしろお路さんだったかも知れないのですが一。



曲亭馬琴

馬琴と越谷も、しっかりと結ばれていました。馬琴の夫人（お百さん）が、越谷南荻島の出。お百の父親が末田（岩槻）の出で、母親は南荻島の出。お百はその後、江戸で履物はきものしょう商に養女に入っていますが、その養親ようしんが南荻島の出～だったのです。

そして、気むつかしそうな馬琴は、きょうわ享和元年（1801）6月、お百の実母（はつさん）が荻島村の弟・六左衛門さん宅で亡くなったときに、そのお宅に駆けつけ、葬儀参列だけではなく、お手伝いまでしたようです。旗本の用人という「武士階級」の最下位でもその身分にプライドのあった馬琴にも、お百に大きな愛情があった証拠だと思われます。

お百は悪妻だったか

お百というのは「悪女」で「馬鹿」だったという噂も強いのですが、この悪い評判は、馬琴がお世辞のつもりで自分の妻のことをよく言わなかったのを周

りが誤解したことに由来するのではないかとと思われるという説も出てきています。お墓も馬琴夫妻、長男夫妻の四人が入っていますので、越谷市民としては「良妻」論に賛成したいものです。

先生は越谷吾山



越谷吾山・「雪を花」所収・「越谷吾山」さきたま出版会刊H1から

馬琴の文学的才能を鍛えたのは、幼いころからの俳句の先生・越谷吾山。吾山は、越谷で俳句を作ったり、指導したりして、53歳で江戸に移りました。馬琴の兄・羅文^{らぶん}の師となり、弟も弟子にしたのです。

吾山は俳句以外でも大きな仕事を残しています。「物類称呼^{ぶつるいしやうご}」という、わが国初めての方言辞典を編纂したのです。いまでも、大学での方言学の講義は、越谷吾山・物類称呼から始まるようです。

末筆ながら、阿波の皆さま方に、写楽発見へのご執念に深甚の敬意を表し、越谷阿波踊りを三大阿波踊りにされたご努力、日光街道の古民家保存へのご配慮に、厚くお礼を申し上げます。

終刊号・これで最後と思うと涙・涙・涙

☆本号に登場の方々などの0.5行略歴

- 薦屋重三郎 1750 (寛延 3) ~ 1797 (寛政 9)
- 曲亭馬琴 1767 (明和 4) ~ 1748 (嘉永 1)
- お百 1764 (明和 1) ~ 1841 (天保 12)
- 越谷吾山 1710 (宝永 7) ~ 1780 (安永 9)
- 東洲斎写楽 1763 (宝暦 13) ~ 1820 (文政 3)
- 村田春海 1746 (延享 3) ~ 1811 (文化 3)
- 多勢子 1779 (安永 8) ~ 1847 (弘化 4)
- 三ノ宮卯之助 1807 (文化 4) ~ 1854 (嘉永 7)
- 平田篤胤 1776 (安永 5) ~ 1843 (天保 14)
- 里勢 1792 (寛政 4) 頃 ~ 1846 (弘化 3)

☆その他、いろいろ～

○ 曲亭馬琴か滝沢馬琴か～

昔は滝沢馬琴でしたが、滝沢は本名の姓で、馬琴は

亭馬琴と呼ぶようになりました。曲亭は「くるわ」、馬琴は「まこと」と読み、「くるわのようなトコロで「まことを尽くす」ヤボな男の意味です。

当時は狂歌の時代で作者には「元木綱」（元のもくあみ）、「筆綾丸」（筆の誤り）がいた時代です。

○ 馬琴と北斎はお友達

「北斎」は馬琴の「北斎とは北斗七星なり。天上では一番強い星」といった言葉から出たようです。

○ 薦重は脚気で亡くなった

当時の江戸では白いごはんばかり食べていて、ビタミンの不足から亡くなることがありました。「江戸悪い」という言葉があったのです。

○ 写楽が、なぜ1年たらずで絵を描くのをやめたかについて

は不明です。侍の身分で、絵を描くことはご法度（ハット）だったから～という理由が強いよう